

2026年6月7日 あけぼの創立感謝の時(77周年)

説教題『主の名を呼ぶ』詩編27 編7～8節 ～信仰って、なに？シリーズ②～

主任牧師 加藤 誠

**「心よ、主はお前に言われる。『わたしの顔を尋ね求めよ』と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。」
(詩編27編8節)**

主なる神は、私たち一人ひとりの名を呼んで語りかけておられることを先週学びました。主なる神は、今日も聖書を通して、さまざまな出来事や人を通して、私たち一人ひとりに語りかけておられます。「わたしはここにいる！」と。「あなたはどこにいるのか？」「あなたは自分の人生において何をなそうとし、何を大切にしたいと願っているのか？」「あなたに命の息を吹き入れ、今日あなたを生かしているわたしがここにいる！このわたしと一緒に歩まないか？」と。

その主なる神は、私たちが「主よ、神さま」とその名を呼び始めることを待っておられます。今、ご一緒に読んだ詩編は語ります。「心よ、主はお前に言われる。『わたしの顔を尋ね求めよ』と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。」。「顔を尋ね求める」というのは聖書独特の表現ですが、「顔」はその人の正面に立たないと見えません。後ろ姿ではなく、ちゃんと正面に回って「神と向かい合う」こと。そのように私たちが「神と向かい合うとき」を、神さまはずっと待っておられるのです。

わたし自身の小さな経験をお話すると、今から数十年前、自分自身に行き詰まり、出口がまったく見えなくなった夜。聖書を開くとエレミヤ書の言葉が次から次に心に刺さってきました。そのとき、わたしの心に十字架の主が示されました。主イエスは沈黙したまま、ひと言も語られません。でも、わたしの心に主の声が静かに響いて来ました。「わたしがここにいる。あなたもここにいていいのだ」と。「あなたもここにいていい」。この言葉がわたしの救いとなりました。この主のもとから、もう一度、歩み始めることができる。それまでの生き方の方向を変えて、主と共に生き始める力をいただいたのです。逆に言うと、わたしはそこまで追い詰められないと、主の前に座り、「主よ、神さま」と素直に祈ることができず、主の語りかけを聴かせてくださいという思いになれなかった。わたしは小さくなれなかったのです。

あけぼの幼稚園の子どもたちは、聖書から「わたしたちを愛してくださるイエスさま」のお話をそのまま素直に受けとり、イエスさまへの全面的な信頼をもって祈り始めます。そのまっすぐな祈りにおとなの私たちがいつも教えられています。

数年前のこと。幼稚園で飼っている小鳥が死んだ時、小さな鳥を悲しい顔でのぞきこんだ子どもたちの一人が言いました。「ことりさんのために祈ろうよ！」「うん！祈ろう！」。幼稚園の玄関の真ん中で、数名の子がまるくなり祈祷会が始まりました。あわてて保育者も手を組んで加わります。「神さま、このことりさんが天国で楽しく過ごせますように。手も足もいたくなくて、いっぱい遊びますように守ってください

い。アーメン。」

また子どもたちは祈ることでお互いにつながることを肌で知っています。

「神さま、今日はみなでお弁当うれしいです。神さまは生まれる前からみんなと一緒にいて守ってくれています。年長さんはもうすぐ卒業です。寂しいけれど、お祈りでつながって、教会でつながって、ずっとみんなが元気でられるようにしてください。アーメン。」

そのように神さまの前に素直に祈る子どもたちに対し、私たちおとなはどうも素直に祈れません。「神さま」「主よ」と呼ぶ、その一声が口から出てきません。信頼しきれていないから？ 祈ることが恥ずかしいから？ 神の前に小さくなれないから？ 人目を気にするように、神の前でも格好をつけようとするからでしょうか。

ある牧師の話を聞きました。求道中の方がこう言われたそうです。「祈ってみなさいと言われるけれど、どうしても『神さま』の一言が出ないのです。どう祈ったら良いのか分かりませんでした。でもあるときふと思い切って『神さま』と呼んでみたら、言えたのです」と。その牧師はそう語る女性の目に涙があふれるのを見て、とても感動すると同時に、とても恥ずかしくなったそうです。そしてこう言われました。「自分の中にはお祈りはいつもしている。『神さま』と呼ぶことは、祈りはじめの枕言葉のように思ってしまったところがある。けれども、この方は『神さま』とひとこと言えたことをこんなにも心から喜んでいる。ほんとうは、私たちが神を呼び、祈れるということは奇跡ともいうべき驚くべき恵みなのだ…ということにすっかり心が鈍くなっている自分が恥ずかしく思えてしかななかった」と。

そもそも不信仰で、信仰のかけらもないわたしが、「神さま、主よ」と呼ぶことができる。それは奇跡であり、上から与えられる大きな恵みです。自分の力では、わたしの中から「主よ」と呼ぶ祈りはでてこないからです。それくらいに私たちは本質的に神から遠い者なのです。小さくなることを恥ずかしく思い、「できる自分、やれる自分」でいたいわたしがいる。けれども、そういうわたしが神の前に小さくされて「主の名を呼び、主を尋ね求める」、そのときを神は待ち続けておられます。なぜなら、主なる神は、私たちが主なる神の顔を尋ね求めて、主の名を呼びながら、この世界を主なる神と一緒に歩み始めることを心から望んでおられるからです。

あけぼの幼稚園は今から 77 年前に誕生しました。戦後の焼け野原の中に遊ぶ子どもたちを見て、二度と愚かな戦争の過ちを繰り返さないように、「聖書を土台とした教育を！」という理念のもとに教会付属幼稚園として設立されました。子どもたちと保護者の方々に聖書を伝えると同時に、教会の私たちが子どもたちから大切なことを教えられてきました。子どもは 100% 純粋というわけではありません。子どもの中にも自分中心の我まな思いはあります。しかし、子どもは自分の小ささを知っていて、神さまに愛され守られていることをうれしく思い、まっすぐに祈る幸いを知っています。この子どもたちと「主の名を呼ぶ」歩みを一緒に重ねていきたいのです。